

山村における作目導入と定着条件

(農試 経営部)

1 背景と概要

山村の農業は耕地面積が狭いことや市場から遠く商品作目が少い上に冬期就労できる作目がないことから低就労、低所得な経営構造となってしまい、これが出稼等の兼業化を助長するとともに過疎をもたらす要因となっている。したがって山村地域農業の課題は小規模で傾斜が多い耕地を有効に活用し経営の集約度を高め所得拡大が可能となる経営構造を創出することである。このため新里村和井内地区を対象に集約作目の導入による農家の経営再編の可能性を検討し、山村における導入可能な集約作目の性格とその定着条件を明らかにしたので指導上の参考に供する。

2 技術の内容

1) 峽谷型山村集落における経営の性格と経営改善方向(表-1)

(1) 山村は、たゞごと肉牛を基幹とした経営が多いがどの部門も小規模で農業従事者の農業での稼動率は50%程度と推定され、その農業所得は約70万円、兼業所得90万円と少く農業部門の再編による所得拡大が必要になっている。このようにして農業再編の意欲をもつ農家は経営主が40~50才代で夫婦で農業に従事しがち耕地面積は70~80ha以上の農家が多い。また山村の農家は、A後継者が農業に従事する主業型農家、B経営主夫婦だけが農業に従事する複業型農家、C高齢者が担い手となっている複業型農家に区分される。

(2) 経営改善の方向は、農業就業率を高めるため夏期に集約野菜、冬季に生しいひけ等の商品作目を導入し経営集約度を高めるとともに周年就労を実現させることを前提とし、家計費は450万円を目指すこと。

2) 導入されるべき作目、品目の組合せと目標とする経営類型(表-2、3)

(1) 導入されるべき作目、品目は、①現在の基幹作目であるたゞごとより土地生産性の大きいこと(10ha30万円以上)。②地場農外雇用充当(1日6千円)以上の労働生産性をもち、かつ労働1人当たり150万円以上の所得を得る作目、品目の組合せであること。

(2) 以上の目標に即し地域の農家の導入意向等に配慮した導入し得る作目、品目は、ウイ化りんご、生及び乾しいひけ、雨よけほうれんとう、グリーンアスパラガスであり、その作目、品目を導入した経営類型は、Aりんご+ハウス野菜+しいひけ+肉牛、Bしいひけ+ハウス野菜+肉牛、Cハウス野菜+肉牛の3類型となる。

3) 経営類型の定着条件(表-4)

(1) 個々の農家への指導充実を図るとともに農協単位及び集落単位で農家を組織化し、農家相互の意欲向上、相互研鑽を図ること。

(2) 隣接する農協間で作目、品目を統一し出荷ロットの確保に努め产地化を図ること。また予冷施設の利用も農協間の連携により効率的な利用に努めること。

3. 指導上の留意事項

1) 新作目導入にあたってはあらかじめ試験栽培を行い技術習得に万全を期すこと。また年次別資金、労働利用計画を策定し経営の転換が円滑にされるよう指導すること。

2) 主業型経営でしいひけを基幹とする場合、約16haの雑木林が必要となる。

4. 参考文献、資料：山村振興における技術開発についての事前評価に関する調査研究 59.3.農試

5. 試験成績

表-1 峡谷型山村集落における経営の性格と経営改善方向

項目 類型	現状の経営								改善方向 上段: 改善方向 下段: 目標達成度合	
	平均耕地面積	平均収穫量	農業従事者	兼業従事者	主な作目 夏期	主な作目 冬期	農業所得	兼業所得		
主業型経営 A	125	27ha 人工林率 26%	主 妻 長男	長男	△ たけ 乾いだれ 水箱	肉牛	万円 121	万円 50	% 56	経営集約化(農業就労率 向上のための商品 作目導入) 100%
複業型経営 B	112	24 25	主 妻 長男	主 △ 妻 長男	△ たけ (は 乾いだれ 水箱)	肉牛	万円 63	万円 105	% 53	経営集約化、高齢化 に対応する作目選 択 50%
複業型経営 C	70	20	父 母 長男	父 母 △ 長男	△ 水箱	肉牛	万円 25	万円 120	% 35	老人、婦人労働活用の 作目導入 30%

注 1) 夏期の農業就労率: 4~10月の家族労働保有量に対する農作業就労労働の割合を示す(推定)。

2) △臨時、日雇 ▲山林労働

表-2 導入される作目、品目の性格

農業	作目	わいだれ	生いだれ	乾いだれ	雨どり	さくらんぼ	クリーン	アーバラス	肉牛	備考
主業型経営(A)	◎	◎	◎	○					○	
複業型(B)		○	◎	○					○	
経営(C)				◎			○		○	
10a当り所得(万円)	323	462	327	832	331	56				
1日当たり所得(万円)	20.1	4.9	9.5	5.4	14.4	3.9				
備考	10a=2ha 代荷	冬期休耕				山林、原野 高齢化				

注 1) たけこの10a当たり所得、1日当たり所得は1ha当たり299万円、7.8万円である。2) ◎は主要作目、○は補助作目
3) 10a当たり所得、1日当たり所得は「新技術体系」新規化農業確立計画資料 56.6 県農政部
但し、ういん(ういん)はヤマセ地域事業開発プロジェクト研究成績概要 59.3 県農政部で、△41作体系。
4) 生いだれ、乾いだれともホタガ場面積で換算している。ホタガ場はムカシ1本(12本/3.3m²)、ヨロイ1本(30本/
3.3m²)の併用とし、平均21本/3.3m²として利用率を70%としている。生いだれでは有効ホタガ6000本
(総ホタガ12000本)で27a、乾いだれでは有効ホタガ20,000本(総ホタガ25000本)で56haが必要である。

表-3 目標とする経営類型例

経営類型	規模、作目 労働力 年齢構成	耕地面積 (a)	農業規模 (a) 畠 (a) 水田 (a) 畠 (a) 水箱 (万円)	作目現状(a、千本、頭)						
				夏期労働活用						
				水	ウ	雨	干	行	軽	
A 1人+夫婦+子供+孫	2.5	30	70	495	30	44	10		13	8 5
B 1人+夫婦+孫	1.5	30	50	211	30		7		13	1 3
C ハウス飼育+肉牛	1.0	30	50	143	30		4	20		3

注 1) 線型計画法による。

表-4 組織の機能と構成員の特徴

組織	農協単位(作目別部会)	集落・地域単位(農場部会支部)
機能	①経営再編に必要な高度な情報、意見の収集 ②作目転換方向決定、作目のマーケティング	①日常の栽培技術支援 ②マラづくり活動
構成員の特徴	①主業型農家の青壯年、集落で10戸以上の存在 ②自動車の運転ができる者少なく、また山村の地形上からも行動範囲は狭くなる。	①複業型農家の高齢者、婦人、集落の多齢化 ②自動車の運転ができる者多く、また山村の地形上からも行動範囲は広くなる。